第116回 定期演奏会

PROGRAM

ワーグナー(ヘンツェ編):女声のための5つの詩「ヴェーゼンドンク歌曲集」(約25分) ★

Richard Wagner (Arranged by Hans Werner Henze):
Fünf Gedichte für eine Frauenstimme "Wesendonck-Lieder"

Ⅰ. 天使 *Der Engel*

Ⅱ. 止まれ! *Stehe still!*

Ⅲ. 温室で *Im Treibhaus*

Ⅳ. 悩み *Schmerzen*

Ⅴ. 夢 *Träume*

── 休　憩 (20分) ── Intermission

ブルックナー:交響曲 第5番 変ロ長調 [ハース版] (約80分)

Anton Bruckner: Symphony No.5 in B flat major (Edited by Robert Haas)

第1楽章　序奏部:アダージョ - アレグロ *Introduction: Adagio – Allegro*

第2楽章　アダージョ:非常にゆっくりと *Adagio. Sehr langsam*

第3楽章　スケルツォ:モルト・ヴィヴァーチェ(急速に) - トリオ:同じテンポで
Scherzo. Molto vivace (Schnell) - Trio. Im gleichen Tempo

第4楽章　終曲:アダージョ - アレグロ・モデラート *Finale. Adagio - Allegro moderato*

指　　揮:下野 竜也 *Tatsuya Shimono, Conductor*

メゾ・ソプラノ:池田 香織 *Kaori Ikeda, Mezzo soprano* (★演奏曲)

管 弦 楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2019 6/21(金)・22(土)・23(日) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール

beyond 2020

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人 日本芸術文化振興会

これさえ見ればわかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論)

19世紀独墺音楽の巨匠2人が登場

ドイツの作曲家、フランスの作曲家、アメリカ大陸の作曲家――と続いて来たPACの定期は、ここで19世紀ドイツ&オーストリアの大作曲家の特集プログラムに戻る。

前半は、ドイツ・ロマン派最大の巨匠ワーグナーの作品で、恋人が書いた愛の詩に作曲した「ヴェーゼンドンク歌曲集」。5曲からなる、官能的な翳(かげ)りを持った美しい歌曲集である。今回は一般に知られている版ではなく、ドイツの現代作曲家ヘンツェが編曲した楽譜で演奏されるのが珍しい。

そして後半には、ベートーヴェン以降の最大の交響曲作曲家のひとりとして有名なブルックナーの中期の名作「第5交響曲」。演奏時間も80分ほどにおよぶ長大なシンフォニーだが、長いのはブルックナーのお家芸だ。その分厚い弦の響きと、豪壮雄大な金管楽器群の高鳴りに心を委ねよう。

今日は、後期ロマン派の2大作曲家による、神秘の世界である。

必聴POINT

ライター おすすめ!!

ワーグナー(ヘンツェ編):ヴェーゼンドンク歌曲集

《巨匠が恋人とともに紡いだ愛の世界》

恋人マティルデが寄せた愛の憧憬の詩に、巨人ワーグナーはどう応えたか? 結ばれぬ愛の悲劇を描いた名作オペラ「トリスタンとイゾルデ」に深い精神的な関わりを持つ5つの歌曲。全篇に流れる愛と苦悩と憧れの感情が、暗くとも美しい歌となって心に迫る。

ブルックナー:交響曲第5番 変ロ長調

《ブルックナーの本領、アルプス的な威容》

低弦の動きに敬虔なハーモニーが加わり、やがて全管弦楽が轟然と爆発する第1楽章冒頭の迫力は印象的。だがそれを更に凌ぐ迫力は、長大な全曲の最後に訪れる、ステージ後方にずらり並んだ金管楽器群がホールを揺るがせて咆哮する聖なる法悦の昂揚である。

PROGRAM NOTE

曲目解説――
演奏をより深く楽しむために
東条 碩夫（音楽評論）

ワーグナー(ヘンツェ編):ヴェーゼンドンク歌曲集

初演：1857年12月23日　チューリヒ郊外ヴェーゼンドンク邸（「夢」のみ）
1862年7月30日　マインツ郊外ラウベンハイム（オリジナル歌曲集）
1977年3月25日　ケルン（ヘンツェ編曲版歌曲集）

「トリスタンとイゾルデ」を連想させる愛の歌

1857年春、チューリヒに住んでいたワーグナーは、富裕な貿易商オットー・ヴェーゼンドンクの援助を受け、郊外の邸宅を提供してもらい、それに「隠れ家」という名をつけて移り住んだ。間もなくオットーたちもその隣地に邸宅を建てて移り住んで来たが、ワーグナーはこともあろうに、そのオットーの若い妻マティルデと熱烈な恋に落ちてしまったのである。当時ワーグナーは44歳、マティルデは29歳。2人は1852年に初めて出会っていた。当然これはワーグナーの妻ミンナらをも巻き込んだ大騒動になり（オットーは賢明にも冷静に対処した）、結局1858年8月にはワーグナーはチューリヒから退去し、ヴェネツィアに移ることになるのだが――。

ワーグナーの生涯を彩るいくつかの恋愛遍歴の中でも、このマティルデ・ヴェーゼンドンクとの恋は、特に際立ったエピソードとなっている。なぜならそれは、折しも作曲に手を初めはじめていた大作「トリスタンとイゾルデ」に大きな影響を与え、また彼女が書いた愛の憧憬と苦悩の詩を基にした作品「女声のための5つの詩――ヴェーゼンドンク歌曲集」をも生んだからであった。

歌曲集は、「天使」（57年10月）、「夢」「悩み」（同12月）、「止まれ!」（58年2月）、「温室で」（同5月）の順に作曲され、その後1858年10月初頭にかけていくつかの改訂が施されている。特に「悩み」の終結部では、ワーグナーは決定稿に至るまでに3度も書き直した、と伝えられる。

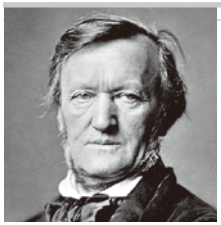
原曲は女声とピアノのために書かれているが、現行版第5曲にあたる「夢」のみ、ワーグナーはピアノのパートを自ら管弦楽に編曲し、マティルデの誕生日の祝いとして夫妻の邸宅で演奏（初演）した。

この「夢」は、のちに「トリスタンとイゾルデ」の第2幕のクライマックス「愛の場面」にも転用される秘めやかな官能美に満ちた曲だ。また「温室で」は、第3幕前奏曲に転用される痛切な苦悩と憧れの情感にあふれた曲である。これを含め、歌曲集全体が「愛の憧憬」の雰囲気を感じさせるが、それこそがワーグナーとマティルデの間に生れていた「満たされぬ愛」の苦悩を暗示していることにほかならなかった。

なお、「夢」以外の4曲のピアノのパートは、のちにワーグナーの忠実な弟子の一人フェリクス・モットルが管弦楽に編曲した。師ワーグナーの後期ロマン派的な色合いに習ったオーケストレーションは、それなりに評判もいい。

現代作曲家ヘンツェの感覚で描かれたワーグナー

ただし、――今日演奏されるのは、1976年にドイツの作曲家ハンス・ヴェルナー・ヘンツェが編曲した版である。音楽全体の骨格には変わりはないが、女声ソロのパートは短3度低く移され、管弦楽のパートはいっそう複雑精緻になり、テンポや表情にもかなり大きな変更が加えられた。その上、ヘンツェは、なんと大ワーグナーの手になる「夢」の管弦楽パートをも、大胆に編曲しなおしてしまったのだ！ 従って今日聴く編曲版の「夢」には、ワーグナーの「トリスタン」のエコーはほとんど感じられない。



作曲家プロフィール　**リヒャルト・ワーグナー**（1813-1883）
Richard Wagner

ライプツィヒに生れ、ヴェネツィア滞在中に急逝した後期ロマン派最大の作曲家。ドレスデンの歌劇場楽長時代に革命に参加し一時は亡命生活を余儀なくされ、のちバイエルン国王ルートヴィヒ2世の庇護を受けて自作の上演用のバイロイト祝祭劇場を建設するなど、波乱万丈の生涯を送る。4部作「ニーベルングの指環」をはじめとする10作以上の舞台作品は強烈な個性に富み、同時代及び20世紀前半の作曲家たちの中で彼の存在を意識しない者はいなかった。

(注) ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ(1926~2012)は、現代ドイツの有力な作曲家。10曲の交響曲は日本でも注目を集めていた。三島由紀夫の小説「午後の曳航」を基にした「裏切られた海」というオペラも作曲している。

楽器編成 独唱メゾ・ソプラノ、フルート、アルト・フルート、オーボエ、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、バス・クラリネット、バスーン、コントラ・バスーン、ホルン2、ハープ、弦楽5部

ブルックナー:交響曲第5番 変ロ長調

初演:1894年4月8日 グラーツ(シャルクによる改訂版)

素朴実直な人柄から生まれた壮大な交響曲

19世紀ドイツの巨人作曲家ワーグナーに対し、並外れた畏敬の念を抱いていた作曲家のひとりが、ブルックナーであった。彼は1873年9月にバイロイトでその大ワーグナーと会い、自らの「第3交響曲」を絶賛されただけでなく、「私がきみの交響曲を全部演奏してあげよう」とまで言われ、恐縮しきったという。

もっともこの時、彼は「第2交響曲」と「第3交響曲」の総譜をワーグナーに見せていたのだが、あまりの喜びにその場でビールを飲み過ぎて酔ってしまい、翌日には、どちらを褒められたのか忘れてしまう。そこでおそるおそるワーグナーに手紙を書き、「トランペットで始まる3番の方でしたでしょうか?」と問い合わせると、余白に「そうです、そうです!リヒャルト・ワーグナー」と書いた返事が届いた、という話も伝わっている。のち1883年2月にワーグナーの訃報に接したブルックナーは、折しも作曲中だった「第7交響曲」第2楽章の最後に荘厳な音楽を織り込み、巨匠に追悼の念を捧げたのであった。

このようなブルックナーの素朴な人物像を描くエピソードは、他にも数え切れないほどあるが、彼の長大で、並外れて壮大な交響曲は、なかなか世に理解されず、彼を落胆させた。だが、それでも彼は、あくまで実直に、自らのスタイルを曲げることなく交響曲を書き続けていった。そして60歳に達した頃、ついに大成功は訪れ、音楽史上屈指の交響曲作家としての名誉をかち得る土壌を形成していくことになるのである。

さほど大きくない楽器編成なのにスケール感は雄大

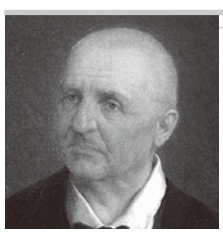
この「第5番」は、「第4番《ロマンティック》」初稿の完成の翌年、1875年から書きはじめられ、76年5月に完成された。のち77~78年に若干の改訂が加えられたが、ブルックナーの交響曲としては珍しく「何度も改訂」されるには至らなかった。その代り、初演の機会もなかなか得られず、やっと1894年になって初演された時は、彼の弟子の一人フランツ・シャルクが勝手に「時流に合わせて解り易くする」目的でオリジナルのスコアのあちこちを削り、管弦楽パートをいろいろ書き換え、シンバルをも追加するなど、曲の響きを全く変えてしまったスコアによるものだったのである。

今日、一般に演奏されるのは、もちろん「原典版」である。ブルックナーの交響曲の場合によく問題となる「ハース校訂版」と「ノヴァーク校訂版」の違いは、この「第5番」に関してはほとんど問題にならない。

曲は4つの楽章からなり、雄渾壮大な威容にあふれる。第2楽章冒頭に現われる、4分の6拍子のイメージ(弦の3連音符)と4分の2拍子との混合は特徴的だ。また第4楽章では、ソナタ形式(注1)とフーガ(注2)形式の合体というおおわざが試みられ、コラール(本来はドイツ・プロテスタントの教会歌の意)風の主題が活躍する。

(注1)ソナタ形式:提示部、展開部、再現部、終結部からなる楽章構成。
(注2)フーガ:いくつかの声部に主題を順次提示していく手法。「フーガ」はイタリア語で「逃げる」の意。

楽器編成 フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ティンパニ、弦楽5部



作曲家プロフィール **アントン・ブルックナー**(1824-1896)
Anton Bruckner

オーストリアのアンスフェルデンに生れ、ウィーンで世を去った後期ロマン派の大作曲家。聖フローリアン教会やリンツ大聖堂オルガニストをも務めたが、オルガン演奏家としての名声は生涯にわたり続き、彼の管弦楽法にオルガン的な響きをもたらす基ともなっていた。交響曲は「第0番」を含め番号付のものが10曲、他に「ヘ短調」1曲。最後の「第9番」は未完成だった。宗教曲やオルガン曲の作品も多い。彼の墓は聖フローリアン教会にある。

リヒャルト・ワーグナー:
女声のための5つの詩「ヴェーゼンドンク歌曲集」

Richard Wagner: 5 Gedichte für eine Frauenstimme, "Wesendonck-Lieder"

作詞：マティルデ・ヴェーゼンドンク　Mathilde Wesendonck

対訳：小味渕 彦之（音楽学・音楽評論）

1.Der Engel

In der Kindheit frühen Tagen
Hört ich oft von Engeln sagen,
Die des Himmels hehre Wonne
Tauschen mit der Erdensonne,

Daß, wo bang ein Herz in Sorgen
Schmachtet vor der Welt verborgen,
Daß, wo still es will verbluten,
Und vergehn in Tränenfluten,

Daß, wo brünstig sein Gebet
Einzig um Erlösung fleht,
Da der Engel niederschwebt,
Und es sanft gen Himmel hebt.

Ja, es stieg auch mir ein Engel nieder,
Und auf leuchtendem Gefieder
Führt er, ferne jedem Schmerz,
Meinen Geist nun himmelwärts!

1.天使

昔々、子供のころ
天使たちが話すのを、よく聞いていた
彼らは天国のこの上もない喜びを
地上の太陽と取り替えるのだそうだ

心が悲しみに暮れて
この世界から隠されて苦しめば
心が静かに血を流して
涙の洪水の中で死んでゆくなら

その祈りが強烈に
ただ救済を請うならば
そこに天使が舞い降りて
優しく空へ運ばれる

そう、私にも天使がひとり舞い降りて
そして、輝く翼の上にのせ
あらゆる痛みから遠ざけて、
私の精神は今や天へ！

2.Stehe still!

Sausendes, brausendes Rad der Zeit,
Messer du der Ewigkeit;
Leuchtende Sphären im weiten All,
Die ihr umringt den Weltenball;
Urewige Schöpfung, halte doch ein,
Genug des Werdens, laß mich sein!

2.止まれ

回り、とどろく時の車輪よ
永遠を切り裂く者よ
広い宇宙に輝く天体よ
地球を取り巻く者よ
永遠の天地創造よ、止まれ
生成は十分だ、放っておいてくれ！

Halte an dich, zeugende Kraft,
Urgedanke, der ewig schafft!
Hemmet den Atem, stillet den Drang,
Schweiget nur eine Sekunde lang!
Schwellende Pulse, fesselt den Schlag;
Ende, des Wollens ew'ger Tag!

止まれ、生まれる力
根源の思考、永遠に創造をするものよ！
その呼吸を止め、その衝動を静め
ほんの一瞬でも、黙るのだ！
高まる鼓動よ、その脈動を縛りつけろ
終われ、この尽きることのない日々の欲望よ！

Daß in selig süßem Vergessen
Ich mög alle Wonnen ermessen!
Wenn Aug' in Auge wonnig trinken,
Seele ganz in Seele versinken;
Wesen in Wesen sich wiederfindet,
Und alles Hoffens Ende sich kündet,
Die Lippe verstummt in staunendem Schweigen,
Keinen Wunsch mehr will das Innre zeugen:
Erkennt der Mensch des Ew'gen Spur,
Und löst dein Rätsel, heil'ge Natur!

甘い至福の忘却の中で
私はすべてのこの上ない幸福を手にしたい！
眼は眼の内に喜びをたたえるならば
魂は完全に魂の中に沈み込み
存在は存在の中に自分自身を見つけ出し
そして、すべての希望が終わりを告げると
くちびるは驚きのあまり黙り込む
いかなる望みも内には生み出されない
人間は永遠の足跡を知り
そしてお前の謎を解くのだ、聖なる自然よ！

3. Im Treibhaus

Hochgewölbte Blätterkronen,
Baldachine von Smaragd,
Kinder ihr aus fernen Zonen,
Saget mir, warum ihr klagt?

Schweigend neiget ihr die Zweige,
Malet Zeichen in die Luft,
Und der Leiden stummer Zeuge
Steiget aufwärts, süßer Duft.

Weit in sehnendem Verlangen
Breitet ihr die Arme aus,
Und umschlinget wahnbefangen
Öder Leere nicht'gen Graus.

3. 温室で

高くアーチ状に、王冠のように茂った葉よ
エメラルド色の天蓋よ
遠く離れたところで生まれた子供たちよ
言っておくれ、なぜ嘆くのかを？

物言わず枝を傾け
空気の中に印をつけ
そして苦悩を黙っていることを示すのに
甘い香りを立ち上がらせている

遠く憧れた願望に
あなたたちは大きく腕を広げ
そして妄想にとらわれ
虚しさや意味のない恐怖を抱く

Wohl, ich weiß es, arme Pflanze;
Ein Geschicke teilen wir,
Ob umstrahlt von Licht und Glanze,
Unsre Heimat ist nicht hier!

確かに私は知っている、哀れな植物よ
私たちが同じ運命であることを
明るく、輝きに包まれていても
私たちの故郷はここではないことを！

Und wie froh die Sonne scheidet
Von des Tages leerem Schein,
Hüllet der, der wahrhaft leidet,
Sich in Schweigens Dunkel ein.

そして太陽が楽しげに
昼間の虚しく明るい光から立ち去れば
本当に苦しむ者は
沈黙の闇に包まれる

Stille wird's, ein säuselnd Weben
Füllet bang den dunklen Raum:
Schwere Tropfen seh ich schweben
An der Blätter grünem Saum.

あたりが静かになって、織りなすざわめきが
不安げに暗い室内を満たせば
重いしずくが漂うのが見える
緑色をした葉の縁に

4. Schmerzen

Sonne, weinest jeden Abend
Dir die schönen Augen rot,
Wenn im Meeresspiegel badend
Dich erreicht der frühe Tod;

Doch erstehst in alter Pracht,
Glorie der düstren Welt,
Du am Morgen neu erwacht,
Wie ein stolzer Siegesheld!

Ach, wie sollte ich da klagen,
Wie, mein Herz, so schwer dich sehn,
Muß die Sonne selbst verzagen,
Muß die Sonne untergehn?

4. 悩み

太陽よ、あなたは毎夕泣いていて
その美しい瞳が真っ赤だ
鏡のように映る海の水面にその身を浸し
早すぎる死を迎える時は

しかし以前と変わらぬ輝きでまた昇る
陰鬱な世界の栄光よ
あなたは再び朝に目を覚ます
誇り高い勝利の英雄のように！

ああ、ならばどうして私は嘆く必要があろうか
わが心よ、どうしてそんなに重く沈むのだ
太陽さえもたじろがなければならぬのに
太陽さえも沈まなければならぬのに？

Und gebieret Tod nur Leben,
Geben Schmerzen Wonne nur:
O wie dank ich, daß gegeben
Solche Schmerzen mir Natur!

そして死だけが生を産み
苦しみだけが喜びをもたらす
ああ、どれほど私は感謝すればよいのか
自然がこの痛みを私に与えたことを！

5. Träume

Sag, welch wunderbare Träume
Halten meinen Sinn umfangen,
Daß sie nicht wie leere Schäume
Sind in ödes Nichts vergangen?

Träume, die in jeder Stunde,
Jedem Tage schöner blühn,
Und mit ihrer Himmelskunde
Selig durchs Gemüte ziehn!

Träume, die wie hehre Strahlen
In die Seele sich versenken,
Dort ein ewig Bild zu malen:
Allvergessen, Eingedenken!

Träume, wie wenn Frühlingssonne
Aus dem Schnee die Blüten küßt,
Daß zu nie geahnter Wonne
Sie der neue Tag begrüßt,

Daß sie wachsen, daß sie blühen,
Träumend spenden ihren Duft,
Sanft an deiner Brust verglühen,
Und dann sinken in die Gruft.

5. 夢

言ってくれ、どんなにすばらしい夢が
私の気持ちを捉えているのかを
それは空虚な泡ではなく
荒れ果てた虚無の中へ消え去るものではないと？

夢、それはどんな時にでも
日毎に美しく咲き
そして天国からの知らせとともに
至福の喜びが引き寄せられる！

夢、それは聖なる光のように
魂の内側に沈み込み
永遠の光景を描き出す
すべてを忘却し、想起する！

夢、それは春の太陽が
雪の中からあらわれた花々にキスをするように
思いがけない喜びに
新しい日を迎える

夢は成長して、花が咲く
夢見心地でその香りを振りまいて
そっとあなたの胸で燃えてから
お墓の中へと沈んでゆく